

令和5年度研究計画書

令和5年 4月14日

研究種類 研究課題	富士山研究 富士北麓地域における侵略的外来植物の防除支援システムの開発と社会実装に向けた研究		
研究代表者	安田泰輔（自然環境・共生研究科）		
研究期間	2023年度～2025年度（3カ年）		
共同研究者	織 朱實（上智大学） 佐伯弘美（認定NPO 法人富士山クラブ） 三ツ井聡美（独・森林総合研究所） 中村圭太・水村春香（自然環境・共生研究科）	研究協力者	
	研究目的	研究目標	
	世界遺産富士山の自然環境保全に向けて、侵略的外来植物の侵入・定着を防ぐ取り組みを提案し、その社会的な実現を図る。	1. 防除支援システムの開発と防除達成に向けたシナリオの提案 2. SDGsワークショップによる普及啓発と実践	
全体の研究計画	本研究は侵略的外来植物の侵入・定着を防ぐ取り組みを提案し、その社会的な実現を図ることを目的として、1. シミュレーションを基礎とする防除支援システムを構築し、日常的な監視や防除の重要性を示すとともに、防除達成に向けたシナリオを提案する。2. 社会実装に向けて、SDGsワークショップを開催し、富士北麓地域の持続可能な社会の形成について議論を進める。そして、個人や団体、来訪者が参加できる様々なSDGsプログラムを開発し、その1つとして防除プログラムを導入する。SDGsプログラムの実施を支援することで、侵入・定着を防ぐ取り組みの実現を図る。		
前年度研究計画及び研究成果	新規研究		
当該年度の実施内容	1-1. シミュレーションモデルの開発 2-1. 世界遺産地域等の取り組み事例の収集 2-3. SDGsワークショップによる普及啓発と実践		
期待される研究成果	○富士北麓地域の持続可能な社会の形成に向けて、侵入・定着を防ぐ取り組みが導入され、侵略的外来植物に由来する生態的リスクの抑制に貢献できる。 ○富士山麓で体験できるSDGsのプログラムは高いニーズがあり、本研究で提案するSDGsプログラムの利活用が期待される。 ○SDGsワークショップの開催により様々な環境問題と他地域の取り組みが議論されることから、地域住民の理解が深まり、環境政策への理解と協力が得やすくなると期待される。 ○自然科学の知見を社会実装する際のスキームとみなすことができ、侵略的外来植物の防除だけでなく他の環境課題に対しても応用できる手法が提案できる。		